



白鳥はかなしからずや、空の青海のあをに染まずただよう

そんな青や藍を求めて
シャガールの青があると
いうニースにいきました。
10年来の憧れを
実現しました。

私は平成6年に緑の豊かな里山に
終の棲家を構え
ました。
職住接近で働い
ていましたので、住まいはい
つも事務所の上階という生活を25年
続けていましたが、ある瞬間に緑の
木々に囲まれた、青空の見える処に移
りたいとの衝動に駆られました。それを
一夜にして実現して下さったのが

一寸木さん夫妻でした。小田原駅から
車で25分新幹線を利用すると東京が
そんなに遠くはありません。
東京から帰ってくると空気の
層が5回変わることは度々お
話してきました。

自然の香り、空気のうち
まき鳥のさえずり、季節の
花々、匂い優しい野の百合、
深紅のもみじ、澄み切った星
空、凜とした冬が楽しめま
す。ところが10年前くらいから気づ
きはじめてからは、私が期待する青空
が1年間に10日ないということ
です。年々その日は少なくなり今年
は殆どありません。今日7月17日梅
雨明けしましたが、空は白霞の曖
昧さを残しています。沖縄にも10
回旅をして

いますが、紺碧の空に照らされた心
のキュンとする海をあをを僅かに1度



だけありました。恩師岡野嘉弘先生
が沖縄で研修中倒れられた。遺骸を
海に散骨するという先生の遺言に従
って奥様がその任に当たられた。悲
しい青の思い出があります。(写真
はその散骨風景です。)



シャガールの青を求めて

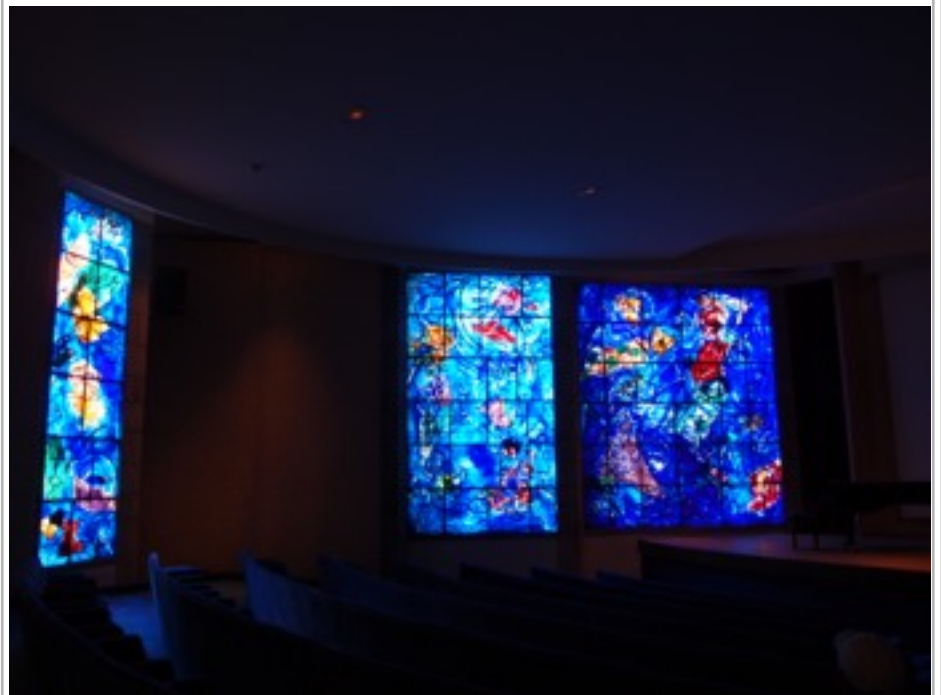
ベートーヴェン第九の4楽章で歌うシラーの詩の一節に『あの天上のかなたに、主はかならずおはします』がありますが、「天上のかなた」の私のイメージでは青と碧が離れないのです。キリスト教では祈るとき「天にまします父なる神よ」で始めます。神学的には天は空という具体性をもっていないかも知れませんが私の素朴な感じでは、何処までも紺碧の空があって、ずっとその先に色とりどりの満開のお花畑が広がっている。そんな天国への道を想像しています。



ニースの海ってどんな色ですかと現地の人に尋ねる

と、「それは、シャガールの青ですよ」と答えが返ってきます。その青に惹かれてフランスの旅を思い立ちました。異常気象はフランスでも例外ではなく、私が期待した空は5日間の滞在では見る事が出来ませんでした。晴れてはいましたが湿度が78%と日本と変わりません。がっかりしてしまいたら、パリの古賀さんから、「晴れているのはニース地方だけです。パリは1ヶ月以上も晴天がありません。温度は20度を超えません。他の地方も同じようです。ニースの太陽を十分味わってください」とメールが入りました。バカンスの始まるこの時期にフランスの人々はがっかりしていました。北欧からやってきたという人も、何年も計画してやってきたので「がっかり」ですと嘆いてはいましたが、家族で楽しそうに海辺にでていきました。ヨーロッパのバカンスについては今月号の「パリ通信」に、高村光太郎の智恵子抄の引用もある味わい深い報告があります。

海の色は空の色によって変わるというのは当たり前のことですが、「水の中に大空あれ」の創世記を思い出します



ニース「マルク・シャガール聖書メッセージ国立美術館」のオーデトリアムのステンドグラスです。コンサートも開かれます。

シャガールの生涯

- ① 1887年ロシアのヴィテブスクの慎ましいユダヤ家庭に生まれる。
- ② 1985年フランスのサンポール・ド・ヴァンスにて死去。98歳の長寿、2度の世界大戦を経験、ユダヤ人と言うことでナチスの迫害を受け、アメリカに亡命している。祖国ロシアでは1917年の革命も体験、数々の戦争体験をしている。
- ③ 1911年パリを始めて訪問、ベルリンも数度訪問するも、1937年フランス国籍を取得、多くの画家と出会い、コクトーとも出会っている。
- ④ 1941年アメリカに亡命 ニューヨークで活躍
- ⑤ 1947年パリに戻る。1950年から南フランス・ヴァンスに移り、数多くの作品を創作。特筆すべきは「聖書のメッセージ」作品群、パリ・オペラ座天井画、ニューヨークのメトロポリタンオペラ壁画
- ⑥ 1966年「聖書のメッセージ」作品群をルーブル美術館に展示した後にフランス国家に寄贈、

- ⑦ 1973年「マルク・シャガール聖書のメッセージ国立美術館」落成
当日のシャガールの挨拶、有名な言葉
「もし人生には必ず終わりがあるなら、私たちが生きている間、愛と希望の色で彩らなければなりません。この愛の中に、人生の社会理論と各宗教の本質があるのです」「若いも若きも愛の世界を新しい色で構築されるでしょう」



Yuri Pen によるシャガール像

「マルク・シャガール聖書の メッセージ国立美術館」

旧約聖書の創世記と出エジプト記からのメッセージが12点あります。別室には「ソロモンの雅歌」が5点あります。日本語のオーディオ・ガイドがあります。私は一人で訪問しましたので4時間かけて鑑賞しました。画家の意図を想像したり、意味を尋ね求めたり、聖書の箇所との関係を考えてたりしました。このような理性的な鑑賞の仕方にはすぐに限界がきます。世界の多くの人を惹きつけて止まない偉大な作品です。感じるままに鑑賞することが良い方法です。

シャガールの絵にはユダヤ人であることを意識しながらキリストの死を無視できなかった寛容さとジレンマ、アンビバレントを私は感じました。特に青の色彩には、どこまでも追い求める心を、平和を願う祈りを、未だ来ぬ平穏な世界を自分の内面にだけは実現したいという哀しみのような芸術家の心情を感じました。

かくて、再び私の青の旅が始まりました。

ピカソ美術館に足を延ばす

実はニースに着いた翌日が火曜日でシャガールの美術館は休館でした。急遽予定を変更し、ピカソ美術館のあるアンティープを目指しました。混雑するニース駅で紺碧の海岸を走るローカル線の切符を買うことは簡単ではありません。何処で買うのか聞くためにも長い行列ができています。勇気を出して地元の人らしき人に尋ね、券売機まで連れて行ってもらい往復の切符を買ってもらいます。紙幣は使えない、硬貨かクレジットカードしか使えない。お金が足りない。その間に間近の列車は発車する。しかし、幸いなことに急ぐ旅ではない

自動販売機で水を買う。水がなかなかでてこない。機械が故障している。後ろの人がガチャガチャしてくれてやっと商品と釣り銭を手にして又、券売機に並ぶ、今度は一人で買わなければなりません。手間取っていると後ろの若い女性が手伝ってくれます。案内所は親切とは言えませんが、現地の人は本当に困っている人を助けてくれます。これが70歳を過ぎた老人の一人旅の特典かも知れません。目指す駅も幾つ目で降りるか分かりません。近くの親切そうな人を選んで聞きます。これが安心できないのが面白い。自分の知っていることが正しいとして教えてくれる。降りようとする「私の勘違いであった。他の人に聞いてくれ。私はここで降りるから」隣の人が笑う、つられて私も何故か笑う。隣の人が後三つと教えてくれる。これは各駅停車だから。

先の人はいつも急行に乗っていたのかも知れない。急ぐことのない旅の楽しさを満喫する車窓の美しい海の青が心を休める。駅からはiPadを便りに歩き出す。若い人々が笑顔ですれ違って行く。愉快である。

ピカソ美術館からの海



ピカソ美術館で孫の絵を自慢する

館内に入って3枚写真を撮ったところで、撮影禁止と注意される。焦って入ったので禁止マークが見えなかったようだ。そのお陰で3枚は撮れたことになる。キュビズムの代表画家だから、絵は私には難しいが避けては通れない思想と預言を感じる

①1881年スペイン生まれ、フランスで活躍

②1973年ニースで逝去

やはり2回の大戦を経験、フランスの共産党にも属したことがある。

スペインにあるゲルニカ（1937年）は有名。原爆の被害を預言していると感じる。残念ながらここにはありません。



一度スペインのゲルニカを見に行きたいと思います。本物を見ると解らなかったことが解るかも知れません。本物の力を私はクリムトの「接吻」で実感しています。

この美術館ではショップに行き、絵はがきを買い求めて、少々おもむろに鞆の中からiPadを取り出し、例の孫の絵を店員に見せて「これはピカソを知らない私の孫が8歳の時に描いたもの戦争の愚かさや平和の期待をテーマにしている」と自慢すると感動したらしく周りの人々に声をかけ、フランス語で色々話しはじめました。関心した様子で、英語で「本当に8歳か？」と聞いてきました。「平和は大切だよ。平和だよ」と若い人も年配の人もしんみりと独り言のようにしていました。

私の一人旅はこのように色んなハッピーニング続きです。帰りにペンネの美術館による。復路の切符は確保してあり、安心して列車に乗りニースに戻り、夜に到着するグループを待つ。



この絵から何を感じますか？かなり丸みが増えているようです。撮ってはいけない写真です。転送しないでください。

白鳥はかなしからずや

空のあをは、いずこにか

セザンヌの故郷

空のあをは霞がかかったようで、湿度は相変わらず78%、蒸し暑く木陰に入っても涼しくはないコート・ダジュールを東から西に向かって海岸線を進む。エクス・プロバンスでは近代絵画の父と呼ばれるセザンヌのアトリエを訪問、当時のままの様子が残されていますが写真は禁止。部屋に不釣り合いの大きなハシゴが置いてあります。リングやオレンジの静物を描くとき平行に見たときの光の具合、上から見たときの光の輝き、上の斜めから見たときの光の具合を描いているといつのまにか原型を留めず、いびつなリングやオレンジが出来上がっていったということ。ここからキュービズムが始まったと現地のガイドさんの説明に何となく納得。ピカソはセザンヌを「唯一無二の師」といいマティスは「絵の神様のようにだ」と讃えています。セザンヌが80回以上も描いたというサント・ヴィクトール山、どんなに美しいのだろうと期待一杯でカメラを構えるも、霞空の遙か向こうに寂しそうに少し見えただけ、がっかりであつた。



アルルは雨だった

しかし、ラッキーの連続

マルセイユ、アビニオンの空も雲の多い日が多く時に激しい雨が降り出すと温度は急激に降下する。雲間の青空に頬ずりがしたい。アルルに到着、ゴッホゆかりの土地である。私の大好きな「夜のカフェ」のモデルになったお店の正面がホテルである。これはラッキーであった。ゴッホは最後の2年間をアルルで過ごし、140点の油絵を描いた。自分が精神病になって絵が描けなくなることを恐れ、それがエネルギーとなって晩年の傑作が多く残されている。中庭が修道院のように美しく静かな回廊のある入院した病院跡、跳ね橋、入院した個室を再現した部屋などを訪れました。静かな環境でしたが、ゴッホは命をあらん限りの力で燃やしたのです。青は絵の中にしかなかった。異常気象とあきらめる。



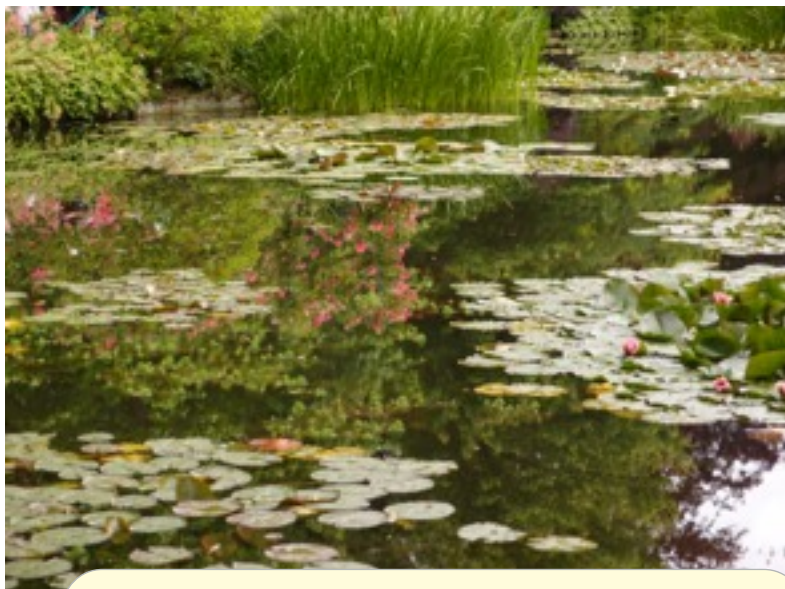
夏草や兵どもの夢の跡

今はコンピューターゲームの呼称となっているカルカソヌは、今回の旅の目的地です。古代ローマ時代から発達した歴史的城塞都市で世界遺産になっています。世界で有名なミステリー・スポットレンヌ・ル・シャトゥーに近いです。美しい満月の夜景を撮ってきましたのでご覧ください。歴史の話は割愛します。

「戦人眠る城壁愛でる月」

1000年後今の原発施設もこんな風に語り継がれるならいいなあと思うのは私一人ではないはず

カルカソヌの夜景 満月 2012/7/7



睡蓮で有名なモネが晩年住んだ
ジヴェルニーの庭園の池

私はパリに行くと必ず尋ねるのがオランジェリー美術館です。ここの雰囲気は騒然としている都会から何千kmも離れているような空間です。睡蓮の池に360度囲まれて心和み、時間の経過を忘れさせます。目が見えなくなっても描き続けたといわれる睡蓮は人々を沈黙の世界に導きます。この後に私が行く場所はモルマタン美術館です。モネの「日の出」を見るために。今回はルーアンにも行き、モネの世界が広がりました。

編集後記 パリ通信もいいですよ！

今回は試みにこのような編集にしました。Macに挑戦して1年が過ぎましたのでその成果を表現しよう考えました。印刷する方にはご迷惑をお掛けするかも知れませんが今後の方針は試行錯誤します。

使用済核燃料関連は今月は休みます。8月5日から10日にかけて広島、長崎に旅をします。延期しています六カ所村の訪問も秋には実行します。整然としたデモの模範はベルリンの壁の崩壊にみられます。愚かといわれても平和を求める人間でありたいです。

